

基礎ゼミナール懇談会（意見交換会）報告

理工学研究科・教授
青塚 正志

基礎ゼミナールはH17年首都大学東京の開学と同時に、以下の趣旨を持つ全学部1年生を対象とする必修科目として誕生した。

「基礎ゼミナールの趣旨」

担当教員の設定したテーマに基づいて、課題発見と問題解決に必要な技法と能力を体験的に養います。また、ゼミナールではグループ討論や、共同調査を通じて、多様な価値観の認識と、人間関係形成の重要性を学びます。

(シラバスより)

このような趣旨と実施形態の授業科目は前身の東京都立大学には無かったもので、担当教員、対応事務組織ともに、開始当時は試行錯誤の連続であった。

H17年度に、基礎教育部会では、基礎ゼミナール部会を発足させ、基礎ゼミナールの趣旨・目的達成のための多面的検討をおこなうことにした。部会は基礎教育センター教務課と連携し、開講曜日、開講クラス数、クラス抽選方式、ゼミナールで使用するPCなどの機器類の利用法、ゼミナール補助員の雇用形態など、実施上の問題点を洗い出し、改善策を検討した。その結果、開講2年目のH18年度には、開講当初に比べて、基礎ゼミナールのハード面は著しく改善された。しかし、担当教員の、基礎ゼミナールの趣旨・目的の理解と、その達成への努力が伴わなければ、十分な成果は期待できない。

H17年度基礎ゼミナール部会では、初年度担当教員から、基礎ゼミナールに関する意見と感想、実施上の工夫点、難しかった点などについて、可能な限り聴取し、それらの分析に努めた。その結果、受講生に知識を解説して理解させることが基礎ゼミナールの主目的ではない、という点に担当教員が大きな戸惑いを覚えたことが見て取れた。他授業科目は、基礎知識から専門的知識へ、段階を経て確実に学生が理解・習得していくことを目的にしているわけであるから、これは当然生ずる困惑であったと思う。また、クラスの受講生の所属が様々で、提供したテーマに関する基礎知識の習得レベルに大きな差があることが、討論、共同調査などのスムーズな進行の妨げになったことがうかがわれた。

H17年度基礎ゼミナール部会では、これらの担当教員

から聴取した意見・感想を取りまとめて、「基礎ゼミナール担当者への手引き」として、次年度担当予定教員に配布した。「手引き」ではまた、基礎ゼミナールの、他科目とは大きく異なる趣旨・目的の再確認と、所属が異なる学生がクラスを構成することを前提としてゼミナールを実施していただくことを特にお願した。

H18年度基礎ゼミナール部会において、「手引き」の配布だけではなく、生の声で意見交換を行う機会を設け、基礎ゼミナールのいっそうの改善を期するのはどうか、との提案があり、基礎教育部会FD活動の一貫としての「基礎ゼミナール懇談会」開催の運びとなった。基礎ゼミナール担当経験教員、次年度新規担当予定教員に、部会を通じて参加を呼びかけた。以下はその案内文である。

=====

基礎ゼミナールご担当、ご担当予定の皆様

基礎教育センター長 上野 淳

基礎ゼミナール部会長 青塚正志

基礎ゼミナール懇談会開催のお知らせ

基礎ゼミナール部会（基礎教育部会分科会）では、基礎ゼミナールの充実を目指し、改善に取り組んでまいりました。このたび、次年度基礎ゼミナール実施の際のアイデアやヒントが得られることを期して、次年度担当予定の先生、これまで担当なさった先生に自由に情報交換をしていただく場としての懇談会を、下記のように企画いたしました。年度末のお忙しい時期とは存じますが、多数のご参加をお願い申し上げます。基礎ゼミナール担当のご経験がおありの先生、次年度初めて担当なさる先生に加えて、基礎ゼミナールにご関心をお持ちの先生方のご参加も歓迎いたします。

記

基礎ゼミナール懇談会

日時：平成19年2月8日（木）17：00

（基礎教育部会終了後）から1時間半程度

場所：南大沢キャンパス6号館402教室

=====

懇談会では、配布資料（H18年度担当教員からの報告書、H18年度SE,TE自由意見など）を基に、基礎ゼミナール実施上の工夫点、問題点について意見交換が行わ

れた。基礎教育部会終了後の夕方の時間帯での会合であったが、50名近くの参加者があり、基礎ゼミナールへの関心の高さがうかがわれた。懇談会は、主催者側が用意した項目について意見を述べ合うという形式で行われた。時間上の制限があり、用意した項目すべてについて十分な時間を費やすことができなかったが、基礎ゼミナール担当経験のある教員からの発言を中心に、きわめて活発な意見交換が行われた。今後の基礎ゼミナール実施にあたっての示唆、ヒントになることを願って、懇談会での主な発言を以下に紹介する。

1. クラス受講生の所属が多様であることの難しさ。

- ・基礎ゼミナールの目標である多様な価値観の認識、人間関係の構築に寄与するだろう。しかし多様故にゼミナール実施の際の難しさがあったのでは？
- ・学生に自己紹介とゼミナールに対する希望を述べさせた。
- ・互いに名前を覚えてもらうために、名札をつけさせた。(名札が有効であったとの複数の感想あり)
- ・A4サイズ紙を用いた手製の机上名札を用意した。
- ・全体討論よりも、グループ(班)に分割しての討論が有効であった。
- ・机の配置換えを行い、班ごとの討論を容易にした。
- ・受講生には、互いに名前を呼び合って質問する、意見を聞く、挨拶をするといった基本的な姿勢を指導した。
- ・理系・文系学生が混在するように班を構成した。

2. 基礎ゼミナールの基本となる「討論」を円滑に進めるための工夫や、その際の問題点など。

- ・最初に討論というのではなく、共同作業を課し、それについての発表を経て討論、という形式を採った。
- ・コンピュータ活用を含むゼミナールであったためか人間関係が苦手な学生が多く、討論が盛り上がらなかった。しかし、具体的に題材を与えてからは討論が活発に行われるようになった。
- ・討論などに積極的ではない学生を教員が把握しやすいよう、班を少人数編成(3名)にした。
- ・班分けしたが、班の中で熱心な学生とそうではない学生との間に溝が生じた。
- ・再履修の2年生がゼミに溶け込めない。
- ・多くを口出しせず、教員の討論への介入はタイミングを見計らって行う。
- ・討論が盛り上がりず困った。
- ・討論が盛り上がらない要因に、教員がしゃべりすぎてしまうこと、があると思う。
- ・討論がつまらないところで落ち着いてしまった場合、

討論の方向の提示や、討論内容の拡大を示唆してやる必要がある。

- ・全員が参加することを目標に、各自の調査・発表、グループ討論、最後に全員がパワーポイントで発表、という流れで行った。
- ・リーダーシップをとる学生がいない班は、討論がうまくいかなかった。
- ・議論に加わってもらう、受講生の意見をリアルタイムで画面に表示してもらうなど、TAを有効に活用した。
- ・受講生が変わるため、毎年同じ様にゼミを実施して同じような効果が得られるとは限らない。
- ・「質問力」の養成に努めた。「自分が主張したいことをきちんと伝えているか」、「相手が質問していることについてきちんと答えているか」を念頭に討論に臨むよう指導した。
- ・躊躇せず意見を言うことができようになることを目標に設定した。

3. 基礎知識の解説と討論との時間配分は？

- ・最初に、基礎ゼミの目的が基礎知識習得ではないことを明確にすべき。
- ・知識が欠けているままでの討論は難しいので、各自の作業として課題をやらせてもらっている。しかしその場合に、学生同士の交流が少なくなってしまうことが問題。
- ・後に行う討論のために、最初の2、3回はテーマに関する説明を行う。その際に積極的にメモを取らせ、また、宿題を課した。
- ・討論重視だが、基礎知識がないと討論もできない。新書を紹介し読んでもらうことによって各自の基礎知識習得を期した。
- ・討論が行き詰るのは、学生が基礎知識に不安を持つ時である。その時に教員がフォローすることが必要。

4. 学生による時間外での調査等の実施、および、それに費やす学生の負担。

- ・完全に学生の決定に任せた。それほど大きな負担にはなっていないと思う。
- ・ゼミ開始当初は、徹夜で本を読んでくるなど、学生が頑張りすぎることがある。学生の到達目標が高すぎて、そのために学生の負担が増していると判断した場合には、「とりあえずはここまで」というように目標を変更させた。
- ・学外調査を課した。学生自身が負担などを含めて判断したうえで、諸機関を訪問しての調査を実施した。

5. 成績評価について

- ・グループ討論が基本だが、最終的に各自でのパワーポイントでの発表、レポート提出を課しそれらで評価した。討論への参加具合は成績評価に考慮しなかった。
- ・討論への参加姿勢で評価した
- ・出席を重視した。
- ・目標を設定し、到達度によって評価した。
- ・クラスによって評価法が違いすぎると不公平になる。
- ・4つの項目を設定して他グループについて評価させる。さらに自己採点をしてもらい（一般に学生は謙虚な点をつける）、それらに出席率を勘案して最終評価を行った。
- ・基本的に合否判定で良いのでは、と思う。
- ・合否判定を行うのならば、出席率などに統一基準を設けるのが望ましい。
- ・評価の練習として、学生に自己評価、相互評価を行わせた。ただし、最終成績評価にはそれらを反映させなかった。

懇談会において、最も多かったのが、そのテーマについて、基礎知識を持っていない学生を含めての討論・調査を円滑に進めるための工夫や、問題点についての発言であった。いろいろなアイデアを駆使している様子が伝わってくるが、それらの中で、多くの担当教員が効果ありと認めているのが、受講生が、互いの関係をより密にするための環境づくりである。すなわち、

- ・班の編成（教室の机の配置変更）
- ・名札、机上名札の活用、

の2点であり、これらは多くのクラスで採用すべき工夫として薦めたい。しかし、そのように環境を整えることが逆効果をもたらし得ることも想定しておく必要があるだ

ろう。上記意見にもあったように、学生構成によっては、班内の人間関係が損なわれたり、討論が不活発になってしまったりすることがある。そのような場合にはゼミナール半ばで班を再編成するなどの対応が必要になる。形を整えるだけでなく、担当教員は常に受講生の雰囲気、討論の進行状況などに気を配ることが重要になる。

基礎ゼミナールの趣旨達成のために、どのようなやり方が望ましいのか？という質問を耳にする。懇談会では、担当教員から、討論、調査を効果的に行うことについて多様な取組み法が紹介された。それらを基にした「基礎ゼミナールの効果的な実施法決定版」といったものの提示が望まれるかもしれない。しかし、上記2点以上のアドバイスは難しいし、意味の無いことだろうと思う。

それぞれのクラスで担当教員が個性を前面に出しながら、人間味溢れたゼミナールを行うことこそが、基礎ゼミナールの趣旨である「多様な価値観の認識、豊かな人間関係の形成」に役立つのに違いない。すべてのクラスがマニュアルどおりにゼミナールを実施し、各クラスが没個性化してしまったら、平均的以上の成果は挙がらないだろう。

基礎ゼミナールは、他授業科目以上に受講生同士、受講生と教員との緊張感を伴った良好な関係が必要であり、しかも、討論、個人作業、共同作業、発表会といったきわめて動的な進行の中でそれを維持することが求められる。担当教員は、安易に基礎ゼミナール実施の「王道」を求めるのではなく、この懇談会で述べられた体験談やSEなどから、多くの「場面」を、学び、想定し、そこから、実際の担当の場において、柔軟性を持って適切に対応できるためのヒントを得るよう努力するべきだろう。